

目次

応永本『論語抄』のことば……………	坂詰 力治……………	一
抄物における「だに」「だにも」「さへ」の用法……………	山田 潔……………	二七
「ひいやり」「ふうわり」から「ひんやり」「ふんわり」へ……………	肥爪 周二……………	三三
——撥音史からの検討——		
狂言台本における「気味」とその類義表現……………	池上 尚……………	五
成城〈曲章三番〉狂言本の性格と用語……………	小林 千草……………	五
——「悪太郎」「鈍太郎」「花折新発知」「腰折」「梟」を通して——		

江戸時代中後期狂言詞章における終助詞ナアについて……………	米田 達郎……………	二〇
——鷺流狂言保教本を中心に——		

『真草二行節用集』における研究課題……………	佐藤 貴裕……………	二三
——異版調査経過報告——		

近世前期上方語における高程度を表す副詞の諸相と体系……………	田和真紀子……………	二四
——「発見的な程度副詞」の台頭——		

「どういう風の吹き回し」成立までの表現形式の諸相……………	鈴木丹士郎……………	二六
-------------------------------	------------	----

『浮世風呂』三編序文の変更に關して……………	長崎 靖子……………	二九
——吾山から半二へ——		

夫婦の諍いから見た路女日記……………	大久保恵子……………	三二
--------------------	------------	----

オレかオイラか、それが問題だ……………	神戸 和昭……………	三三
——近世後期における江戸直参の自称の体系についての覚え書き——		

江戸語・明治東京語の父母の称……………	小松 寿雄……………	三六
---------------------	------------	----

近代漢語の初期使用の検証……………	松井 利彦……………	三七
——初出漢語とその機能——		

『英和字彙』における振り仮名の変遷と漢語の定着……………	手島 邦夫……………	三〇
------------------------------	------------	----

『官話指南総訳』（明治三八年刊）の日本語……………	園田 博文……………	三三
——当為表現・ワア行五段動詞連用形の音便・人称代名詞を手がかりに——		

「本文」の書き換え……………	今野 真二……………	三九
——北原白秋『邪宗門』の場合——		

困惑（自己）から同情・配慮（他者）へ……………	田島 優……………	三七
——感謝表現の発想法の変化——		

電車停留所名の形成と変化……………	鏡味 明克……………	五二
-------------------	------------	----

「世間ずれ」の「誤用」について……………	新野 直哉……………	265
「活動」を「活」とする略語の史的考察……………	橋本 行洋……………	239
——「特活」「学活」「部活」から「就活」へ、そして「婚活」およびその派生語へ——		
東京語の昭和期……………	田中 章夫……………	217
近代の東北地方出身者の文体の統計的分析……………	小島 聡子……………	197
——宮沢賢治・浜田広介・佐々木喜善について——		
外来語系形容動詞の名詞化……………	玉村 禎郎……………	179
——接尾辞「-さ」の下接化の諸因子——		
Jevons 著『Elementary lessons in logic』と『哲学字彙』の見出し語……………	真田 治子……………	161
『明六雑誌』の一人称代名詞の分析……………	近藤明日子……………	141
——文語記事地の文の用例を中心に——		
ブラウン著 <i>Colloquial Japanese</i> とその底本……………	常盤 智子……………	119
『改正増補英和对訳袖珍辞書』と異なる『英仏単語篇注解』の訳語について (2)……………	櫻井 豪人……………	103
「お／＼いたす」と「お／＼申す」……………	伊藤 博美……………	87
——聞き意識と受影性配慮——		
ニコライ・レザノフ『露日辞書』にあるキリル文字で表記された日本語の特徴について……………	浅川 哲也……………	61
近世上方語研究における研究手法について……………	村上 謙……………	43
——用例収集と分析・解釈——		
洒落本における「いっそ」と「いっこう」……………	市村 太郎……………	21
副詞「どうせ」「どうで」の否定的評価の形成……………	林 禔映……………	1
——類似表現を例にして——		
執筆者略歴……………		六七

応永本『論語抄』のことば

坂
詰
力
治

本稿は清原家関係の「論語抄」のうち、東山御文庫本系の最古の写本とされる論語聴塵（清原良賢講、応永二十七年（一四二〇）書写）（以下、応永本論語抄と言う）の翻字本文（中田祝夫編『応永二十七年本論語抄』勉誠社刊）に見られる中世の時代語的観点（とりわけ抄物資料に多く散見されられると思われるもの）から目に止まった語句について取り上げ、記述しようとするものである。

応永本論語抄の書誌については先の中田祝夫編『応永二十七年本論語抄』の解説に詳細な説明がある。また清家論語抄の講抄の依拠関係については柳田征司氏¹⁾の詳説があり、清原良賢講の論語聴塵が後の清原業忠さらに清原宣賢らの論語の講説にあたって広く利用されていることが指摘されている。かかる応永本論語抄についてそこに時代語的特徴を探るというのは、以下の理由による。一般に抄物においては講述者の講述のための覚書、すなわち手控えの性格をもった「聴塵」と、それを基に講述された注釈を受講者側で速記し、修正を加え筆録した聞書きの性格をもった「抄」とがある。この二つの区分識別はその抄文の文末指定辞に着目し、指定辞「ナリ（也）」をとるもの、すなわち講者の手控え＝聴塵、指定辞「ゾ」をとるもの、すなわち受講者の筆録＝聞書として、形式的に捉えられる。そして、講述に際しては講述しようとする内容を受講者に、より具体的に説明しようとするために、擬声語・擬態語が多く使われることになり、それらがゾ文体と結びついて口語抄の特徴ともなっている。ところが、応永本論語抄はナリ（也）体の文末辞をとる講述者の手控えであると形式的には判断される論語聴塵となっているが、しかし本抄のすべてが講述者の手控えとは言えず、そこには話し言葉的な語句や口調が多く現われていると思われるからである。たとえば、

○ 命語ハ此書ノ摠名ゾ。○ 学而巳下ノ二十篇ハ小目也。ナゼニ学而ヲ以テ第一ノ篇ニ置ソト云ニ、人ハ学問ヲメ^{モケ}舜何^{中朱引}○ソ吾何人ソト云所ニ至ヘシ。（学而第二・二七・七～十）

○ 子曰三年——学而ノ篇ニアリ。重出也。但此ニハ其半ヲノス。学而ハ孔・安・国力注。コハ鄭・玄力注也。イヤ

ガキニハ。^{アラス}此語ノ末ニ尚語カアリツヘシイソ。若失錯シタリヤト良賢卿申ケリ。(里仁第四、二二一・7-10)

○モツコト云物也。此二人アツテ大山ヲ作り立シニ、今一モツコヲカハ此山可^ニ成就^一。一モツコニ成テ退屈メヲカハ我モ置ヘシ。今チトノ^ナナレハ勉テセヨトハ云マシキナリ。其故ハ前ノ功ハコトナイ事ナレトモ退屈スル心カ叶マシキ故也。其如ク学者カツトメテ学文稽古ヲセンニ今ト^レレハ成立^{セリ}スヘキヲ、クタヒレテ打ヲカハ我モヲクヘシ。アタラシイ事ソ。マチツトセヨトハス、メマシキ也。志カ叶ハヌ者ナレハナリ。(子罕第九、四〇七・9-四〇八²)

に見られる、「命語ハ此書ノ摠名ソ」のように、聞き書きの形式をとって文末が「ヅ」文体となっていたり、「此語ノ末ニ尚語カアリツヘシイソ」のように文語の複合助動詞「ツベシ」の口語形「ツベシイ」と文末指定辞「ヅ」が結びついた口述の聞き書きの姿が認められ、更には、名詞の「モツコ(奄)」、形容詞の「コトナイ(コトナシ(殊))の口語形」、動詞の「クタビル(草臥)」、副詞の「マチツト」など、室町時代の時代語的特徴を表す語が多用されたりしている。このようなことから、応永本論語抄は講者のまったくの掌控えとは言えず、あらかじめ準備されたノート(基本的にはナリ体による準備ノート)に聞き書き者が口述者の話し言葉的口調や口語的要素を取り入れて編集されたものと思われる。

以下、応永本論語抄に見られる時代語的特徴を示していると思われる語句について、その語句の用例とその語句の意味について、若干の説明を加えて掲げることとする。

一、アガリマチ(上禮) 威張ること。えらぶることノ意。⁽²⁾

○子路、孔子ニホメラレテガリマチニ成テ、立ニモ居ニモ不伎何用不蔵ト云句ヲ一期ノ間吟スル也。(子罕第九、四一三・11)

応永本論語抄に用いられる語の用例は『日本国語大辞典(第二版)』(以下、『日国』と略称)や『時代別国語大辞典室町時代編』(以下、『時代別』と略称)での抄物資料の古例の用例として積極的に引用される中であって、右に示した用例は「ガリマチ」となっているために『日国』や『時代別』のいずれにも取り入れられていない。しかし応永本論語抄での「ガリマチ」は応永本論語抄を忠実に踏襲している清原宣賢講論語聴塵の一本、国立国会図書館蔵本(写本全六冊)⁽³⁾には同一部分の抄文に「子路終身―子路孔子ニ、美ラレテ、アガリマチニ成テ、立ニモ、居ニモ、不伎何用不蔵ト、云句ヲ、一期ノ間、吟スル也」(第四冊目、子罕第九)とあって、応永本論語抄の「ガリマチ」は「ア」が脱落したものと判断できる。したがって、『日国』や『時代別』の「アガリマチ」の抄物資料の古い用例として加えられてよいであろう。古く辞書などの抄物の用例として採用された成實堂本論語鈔(影印本全五冊)⁽⁴⁾にも「コレハ人ノ才能周公ノコトクスクレタリトモ、コノ人ヲコリ、ヤフサカニテ、アカリマチナル者ヲハ、ソノホカノ才ミルニヲヨハス」(二47ウ8)のように用いられている。この「アガリマチ」については、『日国』に御伽草子・鴉鷺合戦物語、俳諧・犬筑波集、玉塵抄などの用例が掲げられ、『時代別』には「辻風ノ吹上ルヤウニ驕テアカリマチナル者也」(莊子抄九)の例を挙げている。抄物に用いられた例として、京都大学図書館清家文庫蔵漢書抄にも「アガリマチ」の用例があることを指摘しておきたい。

二、油ヲシボル 他者にさんざん苦勞させて、その利益を自分のものにするノ意。

○国ノ政ヲ悪クスルヲ蚕食ト云ハ、臨時課役ヲ懸テ民ノ油ヲシホレハ、財宝モ尽テ、家ノ中ミヘスクカ如シ。(為政第二、一一三・2)

「油ヲシボル」は後掲の「齒ニ衣着セス」と同様、室町時代ごろの慣用句と思われる、『日国』にはこの応永本論語抄の用例が最初に掲げられている。『時代別』には応永本論語抄の他に毛詩抄十八の「民ノアフラヲシホリ取、臣下ニ